

重要伝統的建造物群保存地区  
横手市増田伝統的建造物保存地区

- 1 対 象 横手市増田伝統的建造物群保存地区
- 2 所 在 地 秋田県横手市増田町増田  
字本町、字田町、字中町及び字七日町の各一部
- 3 面 積 約10.6ヘクタール（南北約420m、東西約350m）
- 4 選定理由 (二)伝統的建造物群及び地割がよく旧態を保持しているもの
- 5 説 明

増田地区は、成瀬川と皆瀬川の合流点の北に位置する。元禄16年（1703）の絵図には、増田城の東と北に町並が描かれており、遅くとも18世紀初頭には町の骨格が成立し、現在の町割はほぼ近世末期の状況を踏襲している。町の起源は、貞治年間（1362～67）に小笠原氏が増田城を築いたことにはじまると伝えられている。羽州街道の東側に位置し、17世紀中頃には秋田藩公認の定期市が始まり、藩南部の流通拠点として栄え、有力商人は米や商品作物の生産流通にもかかわった。明治維新後も商業地として発展し、銀行設立、生糸仲買、煙草製造、水力発電、酒造業などで隆盛した。大正4年には吉乃鉦山で大鉦床が発見され、戦前にかけて繁栄は最高潮に達した。

敷地は、通りに沿って細長い短冊型に割られており、ほとんどが間口は5間前後と狭いが、奥行は50間から70間と長い。敷地内の建物配置は、通りに面する正面から主屋、鞘付土蔵、庭の順で並ぶものが多い。主屋と鞘付土蔵は、敷地の半分以上を連続する建物で覆い、豪雪に対応する長大な空間がつけられている。また、背後の庭には独立した蔵や附属屋がある。背面が裏通りに接する敷地では、門や板塀を構える場合もある。

主屋は主に切妻造妻入の2階建てで、屋根は現在は鉄板葺であるが、当初はこけら葺が主流であった。居室部は、最前面の底部分を土間とし、ミセ、ブツマ、オエ、イマと並び、鞘付土蔵の蔵前をダイドコロ等とするのが基本である。2階正面には底を張り出て内縁とし、屋根の螭羽を大きく出すのも特徴的である。妻では小屋構造とは関係のない化粧梁を何段も重ね、巨大な梁首を飾るものもある。通り土間の側面に採光のため窓を設ける場合も多い。これらの他に店蔵形式の主屋、入母屋造平入の主屋などもみられる。

地元で内蔵と呼ばれる鞘付土蔵は、土蔵とそれを覆う鞘からなる。前後に掛子塗りの扉を構え、壁は磨き上げられた黒漆喰のものが多い。扉や腰は、漆塗りの木枠によって養生され、その繊細な組子の意匠も土蔵を飾っている。内部は、1階奥を畳敷として床を構えた座敷とするものが多い。太い柱を密に立て、太い梁を架ける等、良材をふんだんに使用したうえ、木部を漆塗りとするものもある。鞘の架構は、土蔵の屋上に棟木等を組んで屋根を葺いている。大空間の蔵前では、明治後期以降トラス構造もみられる。

市の保存計画では、主屋等の建築物119件、門等の工作物9件を伝統的建造物に、庭や水路等13件を環境物件に特定し、保存措置を講じている。近世期に整備された地割等を良く残し、近代に意匠的に発展した当地方特有の町家形式の主屋、鞘付土蔵等の特徴的な伝統的建造物が良く残り、繁栄した在郷町の歴史的風致を良く伝えている。



松浦千代松家（横手市指定有形文化財）



佐藤又六家（国登録有形文化財）ほか



佐藤又六家  
（国登録有形文化財）ほか



旧佐々虎呉服店  
（国登録有形文化財）ほか